
英独仏合同シンポジウム

「CEFRの日本への文脈化を考える」(於早稲田大) を聴講して

小 林 潔

2010年8月20日(木)、日本独文学会ドイツ語教育部会・日本フランス語教育学会・大学英語教育学会の(第1回)英独仏合同シンポジウムを聴講した。テーマはCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)の日本での応用、すなわち「文脈化」である。内外のCEFR促進の中心人物が登場した。

- ・David Newby(グラーツ大学)「CEFR, ELP, EPOSTLのヨーロッパへの文脈化を考える」
- ・西山教行(京都大学:仏語教育)「日本における「言語教育学」の成立の課題と展望—『ヨーロッパ言語共通参照枠』からの発想と展開」
- ・平高史也(慶應義塾大学:独語教育)「日本における『ヨーロッパ言語共通参照枠』の受容—ドイツ語教育と日本語教育を例に一」
- ・久村研(田園調布学園大学:英語教育)「EPOSTLの文脈化について」

Newby教授は教員養成ポートフォリオの作成者である。講演では、CEFRの言語学習者観・言語観、ELP(European Language Portfolio)の権能、語学教育実習生のためのEPOSTL(European Portfolio for Student Teachers of Languages)

の特長が解説された。即ち、学習者は言語使用者・生涯学習者・社会的行為者である(各々、行動中心主義・学習者自律・複言語主義/異文化認識に対応)。CEFRは発話と運用に力点を置いており、運用中心の評価とは学習者のスキルを発達させるという謂で、更なる責任が教師に課せられるという。西山教授は日本のCEFR推進者と言って良いが、報告ではあえて負の側面(移民選別の道具となるなど)を指摘した。平高教授は、教材に関したCEFR応用の困難、国士舘大学英独仏中日5言語ポートフォリオでのCEFR応用の試み(CEFR6段階を10段階に細分化)、国際交流基金の日本語教育スタンダードと「東アジア共通参照枠」の可能性を論じた。久村教授はEPOSTL日本版の翻案者であり、プロ教師育成のためのリフレクティブ・アプローチ/プラクティス(教師同士の相互批評・内省・実践・改善)を提唱した。

神奈川大学のロシア語教育に於いても堤正典教授と筆者とでCEFRを利用した非専攻課程習得基準策定に取り組んでおり、他言語プロパーでの議論は参考になるところである。次回2011年3月18

日開催予定の「CEFRの文脈化を図る」にはロシア語教育関係者も参加予定である。また、本シンポの中心メンバーにより来年度に向けた科研費応募（代表は西山教授）もなされ、更なる展開もはかられている。この「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究」には筆者も連携研究者として関わるが、採択の成否に拘わらず、このような文脈化へ

の取り組みは今後も活発になるであろう。一方で、ロシア語教育／学習の初期段階にあっては行動中心主義を制限せざるを得ないという見解や、翻訳等の媒介能力がCEFRの想定以上に必要との見方（堤教授及び大阪大林田教授日本ロシア文学会報告（2010年11月6日於熊本学園大））も現状を正しく把握したもので、個別言語の特徴と日本での位置を見据えた議論も更に必要である。
